
まおのもり

三九

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まおのもり

【Nコード】

N4576I

【作者名】

三九

【あらすじ】

1話完結の短編小説。

双子の姉弟のお話です。一部残酷な表現あり？

「いい加減しつっこいなあ！ あたしがこっちって言ったらこっちなのだ！」

「地図見てええええ！ お願いだから現在地確認してええええ！」

深い深い森の中、うねる枝を張り巡らせた暗緑の木々に遮られ、天空から降り注ぐ金色の光は地に届かない。

昼日中でも闇に包まれ、動物ですら方角を見失うと言われているこの地で、彼女らは先刻から数時間もの間彷徨い歩いていた。

ぶっっちゃけ迷子である。

彼女らは、双子の姉弟。父母からは真緒と直緒と名付けられた。真面目で素直で、いつまでも一緒にいられるようにと、願いを込めて。

しかし、その願いは叶えることはできなかった。
叶わない、願いだった。

だから、二人は逃げ出した。

二人でならば、逃げ切れなかったから。

しかし、どこをどう間違えたのか、双子は迷いの森に足を踏み入れてしまい、逃げることも帰ることもできなくなってしまった。

「地図なんて、現在地が解らなければ意味ないじゃない。見たって無駄よ」

「コンパスとかは！？ 持っていないの！？」

「あんたが持つてくると思ってたんだけど」

「人任せ！？ 他力本願！？ 誰のためにこんなことしたと思ってるの！？」

直緒の叫びが、虚しく木々の間に飴する。

不気味な鳥の鳴き声が、遠くの枝の上から聞こえた。

真緒は肩から下げた大きな巾着の紐をぎゅっと握り締め、隣に立って必死に地図を広げている直緒に目を向けた。

「あたしのためでしょ。知ってるわよ」

眉間に寄せた皺と、尖らせた口が真緒の心情を表しているようで、直緒はバサバサと地図を引っ繰り返す手を止めた。

「あ……ごめん。別に真緒のせいだなんて思っていないから……」

直緒は双子の姉に擦り寄って、その手を重ねる。

昔から、機嫌をとるときには、こうやって手を繋いで歩いた。こうやって、身体の一部が繋がっているとほっとする。

本当ならば全部繋がっていたいのだが、それは不可能な話だ。

直緒は真緒と手を繋いだまま歩き始める。

「このまま歩いて、どこに行くのかな？」

「知らないわよ。地図見たら？」

ざくざく、下生えを踏む足音ばかりが聞こえる。

直緒の言葉は、あっさりと真緒に切り捨てられた。

直緒は真緒とそっくり同じように、眉を寄せて口を尖らせる。

容姿は似ていないし性格も正反対だが、動作だけはまったく同じだった。

口を尖らせて拗ねる癖も、不安なときに何かを握り締める癖も、コピーしたようにまったく一緒。

踏み出す足も同時に出して、立ち止まるタイミングまでぴたり同じだ。

双子の前には、一軒の家が建っていた。
どう見ても廃屋。人が住んでいる気配もない。

「なんでこんな所に家があるんだろ？」

「丁度良いじゃない。中で休みましょ」

「ええ！？ それはマズくない？」

こんな森の奥に一軒家。しかも家人はいなくなって久しい様子だ。
そのような家に入るなど、とても怖くてできない。

しかし真緒は直緒を置いて家の中に入ってしまった。
この姉のこういった行動力が、常にトラブルの基となっているというのに、一向に改善される気配はない。

気付けば真緒は、家の窓から顔を覗かせて手を振っていた。

「何してんの？ 早く来なさいよ！」

直緒は上向いて枝の絡み合う空を見つめ、諦めの多分に入り交じった溜め息と共に、がっくりと肩を落として視線を地に向けた。
昔から、姉には逆らえないのだ。

直緒が恐る恐る家の中に入ると、内部は驚く程整っていた。
ボロボロだった外壁とは違い、暖色系の壁紙は染み一つなく、床は磨き上げたようにピカピカだ。

ソファ어도ベッドも綺麗に整えられ、ゴミ一つ落ちていない。
テーブルの上には小さなランプと、花瓶が一つ。

花瓶には、森でよく見かけた白い花が飾ってあった。

「ねえ、変だよ。誰もいないのに、なんでこんなに綺麗にされてるの？」

「猟師さんの休憩所とかなんじゃないの？　きっと最近まで誰かいたのよ」

直緒は不安げな声を隠そうともしないが、姉はまるで気にしていない。

その大雑把な性格が、直緒には羨ましくもあり、改善してほしい最大の欠点でもあった。

こんなに怪しい家を見て、何故そのような発想が生まれるのか。双子という最も近い存在でありながら、直緒には姉の思考が解らない。

「あ、見て。食べ物もある」

キッチンにいる真緒が、嬉しそうに笑うのが聞こえる。

そこにあったのは、今朝切り捌いたばかりの、肉の塊だった。

干物にでもするつもりだったのか、幾つかは小分けにされて干されている。

いよいよ直緒は怖くなり、真緒の手を引いた。

「ねえ、やっぱおかしいよ。なんで誰もいないのに、こんなものが置いてあるの？」

「猟師さんが捌いたんじゃないの？　たぶん、今も狩りに行ってるのよ。帰ってきたら、分けてもらえるように頼んでみましょ」

どこまでも大雑把な姉は、弟の手を振り払い正体不明の肉を皿に

乗せる。

二人で食べるにはやや多めの量を取り分けて、テーブルの上に置いた。

直緒は姉の姿を見つめ、自分の服の裾をきつく握り締める。

「ねえ、もう行こうよ！ 勝手にそんなことしたら、怒られるよ！」

直緒はいつまでも肉の前から離れない姉の手を、思い切り引っ張った。

焦れたように足を踏み鳴らし、その度に直緒の短い黒髪が揺れる。

真緒はようやく振り向いて、直緒の黒い瞳を覗き込んだ。

「そんなに恐いの？」

直緒の瞳に映った真緒が、クスクス笑いながら小首を傾げる。

直緒とは似ても似つかない、真っ白な長い髪が揺れた。

真緒の口から赤い舌がちらりと覗き、唇を舐め上げる。

「ねえ、そんなに恐いの？」

再度問う真緒の目が、黄色く鈍い光を放つ。

直緒は、知らず知らず溢れた冷や汗が頬を伝うことにも気付かず、真緒の瞳を凝視していた。

わずかな振動を手の先に感じる。

一瞬、真緒が震えているのかと思ったが、自分が震えているだけだった。

「なんで、ここがこんなに綺麗なのか、気にしてたわね。教えてあげましょうか？」

真緒は口角を持ち上げ、ぞっとする程に美しい微笑みを浮かべた。

「ここ、あたしの隠れ家なの」

直緒は目を見開き、咄嗟に真緒の手を離して後退りするが、逆に真緒から手を掴まれてしまい無理だった。

真緒は微笑みを浮かべたまままで話を続ける。

真緒は、夜毎家を抜け出しては、ここで獣を狩っていた。
自分の欲を抑えるためだ。

そうでもしないと、この衝動を抑えられなかったのだ。

——喰いたい——

真緒の白磁のような細い指が、直緒の頬を撫でる。

「ね、直緒。あたしと、一つになりましょ？」

「お、お姉ちゃん……」

「あんたを、食べてあげる」

人間の女の腹に宿った、鬼の赤子。

同じ日に、同じ女から生まれたのは、白い髪の鬼児と、黒い髪の男児だった。

真緒の鋭い牙が、日に焼けた直緒の首筋に噛り付く。

鬼の女児は、その身に流れる鬼の血と 人の血の争いを見つめてきた。

ある日は人の血が勝り、ある日は鬼の血が勝る。

鬼の血が騒ぐときは、こうして獲物を狩ってその血肉を喰らった。

唇を赤く染めて、真緒は静かに微笑んだ。

「あたしたち、ようやく一つになれたのね」

その手に最愛の弟の首を抱き、真っ赤に染まった鬼女は狂ったように笑い続ける。

いつしか、人々は口を揃えて噂するようになった。
この森には、人を喰らう魔王が棲むと。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4576i/>

まおのもり

2010年11月13日21時37分発行